

大学周辺史

——倭王権と河内の巨大古墳群——

村 川 行 弘

1 中国・朝鮮史料にみえる倭

中国史料にみえる倭の初見は、漢代初期には存在したといわれる「山海経」第12海内北経にある「蓋国は鉅燕の南、倭の北に在り、倭は燕に属す」という戦国時代（紀元前5～3世紀頃）の記事である。また、後漢の王充が著わした「論衡」には周公や成王の時代（紀元前11世紀頃）に倭人が暢草（一種の香草）を献じたことが記されている。いずれも史料価値は高くない記録ではあるが、倭・倭人の記事としては最古のものであり、記事にみえる倭・倭人は日本列島の住民のこととは限らない記述でもある。

中国正史の最古のものは紀元前1世紀に成立した「史記」であるが、これにつづく正史は、1世紀後半に後漢の班固が撰した「漢書」で、その第28巻地理志には「それ楽浪の海中に倭人有り、分れて百余国を為す。歳時を以て来り献見すと云う」とあり、古来、日本列島のことを指す最初の記事とされている。紀元前202年に劉邦によって前漢が成立し、その後、武帝によって元封3年（紀元前108）には衛氏朝鮮支配の全領域を版図とすることになる。「漢書」では異民族は「四夷伝」に記述し、「地理志」には漢の領土を記しているので、この時期の倭人は百余国に分れていても楽浪郡の支配下にあったと地理志の編者はみているのである。

紀元後8年に前漢は滅亡し、王莽の「新」が成立するが、25年には後漢が誕生する。この新という短期政権が鑄造した銅銭の「貨泉」が日本の弥生時代遺跡を中心に検出されるので、政変による亡命者をも含めて倭国との交流があったことは確認できる。とくに貨泉の出土は大阪府・佐賀県に顕著で、他に長崎県・熊本県・宮崎県・福岡県・広島県・京都府・長野県から発見されている。

「後漢書」光武本紀では建武20年（44）「東夷韓国の人が衆を率いて楽浪にい

たる」という記事があり、翌21年には「鮮卑が遼東を寇し、遼東大守祭彤がこれを破る」記事があり、23年には「高句麗が種人を率いて楽浪にいたる」とあり、25年には「貊人^{てんじん}が寇したので遼東大守祭彤がこれを降す。烏桓^{うがん}の大人が衆を率いて内属す」とあり、つづいて建武30年(54)には「鮮卑の大人が内属朝賀す」とある。光武帝の時代、東アジアの政情の安定とともに周辺諸民族が後漢の支配体制下に入ったことと、後漢の統制力が四周の国々に及んだことを推測できる。

「後漢書」は5世紀前半に南朝の宋の范曄^{はんよう}が撰したもので、その「列伝75東夷」条には「建武中元2年(57)、倭奴国貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす」とある。大陸・朝鮮半島の諸民族が後漢の支配下・統制下に入った情報を知った倭奴国は、いち早く後漢に朝貢し、その冊封体制下に入って、後漢の権威を背景に地位の保全と勢力の拡大をはかったものとみられる。東アジアの辺縁部に所在していた倭人達が中国の政情の変化に敏感に反応し、対応していた実態を推測させる。倭奴国王は後漢の権威と支援を背景として倭人社会に地域的支配体制を伸張したであろうし、外交機能・情報機能・官職機構も作動していたと考えられる。

弥生時代の遺跡から発見される中国・朝鮮半島渡来の遺物、例えば、北方系文物を代表する多鈕細文鏡の点在(大阪府・奈良県からも出土)、北九州に顕著な支石墓の墓制、前漢鏡・後漢鏡・銅剣・銅鉞・銅戈など各種の青銅器の検出(北九州と大阪湾沿岸に顕著)などは、中国・朝鮮半島との水上の道による人間の交流の結果にもとづくものであろう。

江戸時代の天明4年(1784)福岡県志賀島で「漢委奴国王」と薬研堀りされた純金印が発見され、これこそ光武帝から下賜された倭奴国王の金印であり、委奴国は北九州に実在したとされて今日に至っている。「カンのワのナの国王」・「カンのイト国王」など読み方の問題、真印説と偽印説など問題点はあるが、一応真印とされ国宝となっている。大月氏や匈奴と同格に扱われたのは異例かも知れないが、後漢の遠交近攻策の産物ともいえよう。

後漢の安帝の永初元年(107)には「倭国王帥^{すいしやう}升等生口160人を献じて見えんことを願い請う」という記事があり、倭国王と記され、生口は奴隷であるの

で、身分差の存在したことを示している。おそらく東アジアの政情の変化と連動した倭人社会の対応であったと考えられ、北九州では伝統的墓制であった支石墓がみられなくなり、甕棺に代表される地域首長墓も姿を消していく時期にあたる。

後漢では中平2年(185)には張角による黄巾の乱がおこり、初平元年(190)には董卓が献帝を擁して権力を握ったため中原は大分裂し、遼東太守公孫度は独立の意図をもつようになる。この時期、後漢霊帝の中平年号をもつ鉄刀(節刀)が天理市東大寺山古墳から発見されており、情報交流のあったことを示している。建安2年(204)には公孫度の子・公孫康が帯方郡を創設し、「魏志韓伝」では「これより後、倭・韓ついに帯方に属す」とあって、倭国・朝鮮半島が公孫氏の支配下に入ったことを記している。この倭が日本列島を指すものかどうかは問題であろう(「桓檀古記」や「北倭記」の記述はこれらの問題に一視点を与えている)。

一方、後漢書東夷伝には「桓・霊の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、歴年主なし。一女子有り、名を卑弥呼と曰う。年長じて嫁せず。鬼神の道に事え、能く妖を以て衆を惑わす。是に於いて、共に立てて王と為す」とあり、共立された女王卑弥呼の出現の前の桓帝(147~167)と霊帝(168~188)の時期に倭国大乱が発生したことが記されている。鬼神の道とか鬼道とかは、190~215年の頃、陝西の南部から四川の東部にかけて宗教共和国を建てていた五斗米道教団の神々のことという説もあるが、卑弥呼がその巫女的女性であったか、全く別の宗教信奉者であったかは明らかでない。後漢書の記事は魏志を参照したものであるが、魏志は太平御覧所引の魏志さらに魏略を源流とするものである。魏志倭人伝(三国志・魏書・東夷伝・倭人条のこと)には「其の国、本亦男子を以て王と為し、住ること7・80年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑弥呼と曰う。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年己に長大なるも、夫婦無く、男弟有り、佐けて国を治む」とあって、帥升王の時期以来倭国内乱の発生していたことを記している。梁書や北史にも霊帝の光和年中に倭国大乱があったことが記され、霊帝の光和年号は178~183年であるので、弥生後期の時期のことになる。倭奴国が後漢の冊封体制

下に入ってから150年、北九州に入った大陸諸文化は確実に近畿に浸透している。北九州と近畿の文化が逆転するのは弥生中期である。近畿のエネルギーが新しい体制を求めて帥升王権を揺さぶりはじめたのである。瀬戸内海の沿岸各所の見晴しのよい地域を中心に軍事的機能をもった弥生系高地性遺跡が出現し、銅鐸祭祀が盛行する時期にあたる。大阪湾沿岸に集中する山頂式高地性遺跡を代表する芦屋市会下山遺跡は、標高200米の尾根上に2か所の祭祀場址・首長住居址・7住居址・煙火場址・倉庫址・泉址・排水溝・土墳墓群をもち、中国製の漢式三翼鏃・銅鏃・大形鉄鏃・鉄斧などの鉄器類・ガラス小玉などを出土し、軍事集落の典型となっている。

この時期の倭人については、安徽省亳縣元宝坑村1号墓出土の74号磚に「有倭人以時盟否」なる陰刻文があり、靈帝の建寧2年(170)銘の磚も伴出しており、倭国大乱の時期にあたるので、何処の倭人のことが焦点となっている。倭人磚の出土した1号墓の被葬者が会稽の太守であることも今後の考察課題となる。

220年には後漢は滅亡し三国時代に入るが、この年に曹丕は魏帝となり、翌221年に劉備が蜀帝となる。大和3年(229)孫権が呉帝となり、遼東太守公孫淵に同盟交渉の使者を派遣する。魏を北と南から挟撃するためである。232年に公孫淵は呉と同盟を結ぶが、233年には呉の使者達を斬って魏に属することを誓う。しかし、景初1年(237)から2年にかけての魏の遼東攻撃で公孫氏は滅亡する。このようにして遼東・朝鮮半島の政情が一転した翌景初3年(239)「倭の女王、大夫難升米等を遣わして郡(帯方郡)に詣り、天子に詣りて朝獻せんことを求む」という魏志倭人伝の記事になり、帯方郡太守劉夏は吏に命じて使者を洛陽まで送らせる。洛陽に到着した倭女王の使者は、親魏倭王の称号と金印紫綬・銅鏡百枚など数々の賜物や滞在中に収集した珍品をみやげに卑弥呼女王の許に帰国する。魏志倭人伝では、正始元年(240)に帯方郡太守弓遵・梯携らに詔書・印綬を託し、倭国に派遣す。倭王は使者に付し上表、謝辭を陳べるという手順が記されている。公孫氏支配から離脱した女王卑弥呼は魏帝国を宗主と仰ぐ政治体制を選び、30余国の地域的連合国家に指導性を発揮したと考えられる。魏の冊封下に入ったということは魏の曆を使用するということで

あるから、この時期に倭国では景初4年(240)などという年号は使用できない。福知山市出土鏡や辰馬考古資料館蔵鏡にみられる景初4年銘は当時においては有り得ず、正始元年号しかない。倭国が魏の冊封下から離れた時期の仿製鏡ではないかという疑点が存在する。

魏志倭人伝の記事には邪馬台国^{やまたいこく}の国情が録されており、大人・下戸・奴婢と記される身分制社会、大人に対する下戸の対応にみられる柏手を打って礼拝し、土下座して命を聞くという現在の神社祭祀などにみられる礼拝形式、犯罪に対する法的処置、官職の機構、卑弥呼の宮殿守衛や狗奴国との交戦にみられる軍事機構など、卑弥呼が呪的巫女的女王として共立されているにしても、古代国家と呼び得る組織を備えていることは注目しなければならない。国家形成史という観点からみれば、最初の国家的王権・政治的権力の記録といえる。

243年には女王卑弥呼は、大夫伊聲耆・掖邪狗らを遣わして朝貢し、245年には帯方郡に託し大夫難升米に黄幢を賜与され、247年には倭女王、載斯鳥越を帯方郡に遣わして狗奴国との年来の交戦を報告する。これに対応して太守王頎は張政らを派遣し「倭人を告諭す」という記事になる。卑弥呼女王が指導する邪馬台国は狗奴国と交戦を続け、あるいは邪馬台国が魏と結び、狗奴国が呉と結んで代理戦争を強いられていた感もするが、交戦中の247～248年の頃に女王卑弥呼は亡くなり(戦死の可能性あり)、倭国再び内乱の末、宗女台与^{いよ}が共立される。一方、魏は正始6年(245)には高句麗・東沃沮・北沃沮・夫余などの東夷圏北半の平定を終わっている。そして西晋の武帝の時、泰始2年(266)の倭の女王遣使貢獻の記事をもって、邪馬台国・倭国の記事は中国史料から消えてしまう。弥生時代の宝器・儀器を代表する銅鐸・銅剣・銅鉾・銅戈などの青銅器が埋納されて再び取り出されることが無く、軍事的要因をもった高地性集落が姿を消していくのも、この頃からである。

中国では263年に蜀滅亡、265年に魏滅亡、同年西晋の司馬炎が帝を称し、280年に呉も滅亡し、313年には楽浪・帯方郡も滅亡、316年に西晋が滅亡して五胡十六国の時代に入る。中国の統制力が弱体化し、中原に混乱が起ると、四囲の国々は中国の支配体制下から脱し、中国の権威を背景としてきた政権を倒して新政権を樹立するなど、大陸の政変と連動した動きをみせるが、倭国もそ

の例外ではなかった。

中国史料の欠史の時期を埋める史料が朝鮮の三国史記（新羅本紀・百濟本紀）・三国遺事そして高句麗好太王（広開土王）碑文である。

朝鮮史料、とくに新羅本紀では紀元前50年の頃以来、倭人が辺境を侵した記事があり、紀元後14年にも倭人が兵船百余隻で新羅の海辺の民戸を侵している。173年には倭女王卑弥呼が新羅に遣使したという時期的には問題になる記事があり、193年には倭国大乱と関係するのかも知れないが、「倭人大いに飢え新羅に食を求め来たる者多し」の記事がある。その後も倭の新羅出兵記事が多くみられ、それぞれの記事の事実とはともかくとしても、新羅と倭とは友好関係にはなかった様子が記録されている。

391年にはじまる高句麗好太王との交戦はその代表記事である。414年に長寿王によって建てられた高句麗好太王碑は、391年から412年まで高句麗に君臨した好太王の顕彰碑で、15世紀に発見されたものであるが、日本では明治17年（1884）に陸軍参謀本部の酒^{きこう}勾景信大尉が柘本を伝えたことから研究がはじまった。李進熙は「来渡海」は欠字で酒勾が石灰を塗って3字を補った可能性を指摘し、鄭寅普は「以辛卯年-来。渡海破。百残~~国~~-~~侵~~新羅-以為-臣民-」と読む説を出し、朴時亨は「倭が辛卯の年に来たので、高句麗が海を渡って倭を破った」と解し、金錫亨は「高句麗が海を渡って百濟を破った。倭は北九州にあった百濟系の倭」と解している。現状では碑文は中国政府によって安全に保持されており、中国・朝鮮・日本の関係研究者が現地で現物を充分にたしかめた上で、漢文のルールに従って解説をおこなえば明確にして共通の理解が可能である。碑文からは391年から404年まで倭が高句麗と交戦し、最終的には敗退したことが知られる。また倭が新羅とは友好関係は無く、百濟とは友好関係もっていた様子も記されている。同じような状況は朝鮮史料の5世紀の記事を通じてみられる現象である。

中国史料の晋書安帝紀・南史倭国伝では晋の安帝の義熙9年（413）倭（王讃）の遣使がみられ、この年には高句麗も遣使している。おそらく朝鮮半島での交戦と関連して中国の権威を背景に優越権を得ようとした政治的行動とみられる。結果は、高句麗・百濟外交が成功したらしく、416年には高句麗王は征

東大將軍に叙せられ、420年には百済王が鎮東大將軍に叙せられている。倭については南宋の永初2年(421)倭讃、修貢、爵号を授与される(宋書倭国伝)として、以後中国史料に再登場することになる。425年、讃、司馬曹達を遣わし上表、貢献。430年、倭国王貢献。438年、倭国王珍、貢献。「使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東大將軍倭国王」と自称。安東將軍倭国王に任命される。倭隋ら13人、將軍号を受く(宋書文帝紀)とあって、高句麗王・百済王の爵号を念頭に安東大將軍を自称したに拘らず安東將軍倭国王の称号が与えられただけで、金印紫綬を与えられた時代とは異なった中国の外交政策をうかがうことができる。443年、倭国王済、朝貢、安東將軍倭国王に任命される(宋書文帝紀)。451年、倭王倭済、安東大將軍に進められる(宋書文帝紀)。倭国王済、使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事を加えられる。安東將軍はもとのまま。済、23人の將軍・郡号授与を要請(宋書倭国伝)。460年、倭国、貢献(宋書孝武帝紀)。462年、倭国王世子興、安東將軍に任命される(宋書孝武帝紀)。463年には高句麗王は車騎大將軍となっている。477年、倭国、貢献(宋書順帝紀)。478年、倭国王武、上表し開府儀同三司を仮称。使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事安東大將軍倭王に任命される(宋書順帝紀)。倭王武は上表して高句麗・百済王の爵位と対抗しようとしたが満足すべき任命はなかった。しかし、六国あるいは七国の都督・諸軍事号の要請や將軍・郡号の要請からみると、国家的規模の王権を想定することができる。479年、倭王武、鎮東大將軍に進められる(南齊書倭国伝)。ようやく百済王と肩を並べられる爵位につけた状況である。しかし、480年には高句麗王は驃騎大將軍となっている。502年、倭王武、征東(大)將軍に進められる(梁書武帝紀)。この時点では倭の外交政策は十分な成功を見ず、高句麗・百済の外交手腕の方が高かったことが推測される。東アジアの政情の変化に敏感に反応している倭の五王の上表文からは、高句麗遠征計画にみられる海外出兵や、国内統合の戦闘の記事もみられ、強力な国家的組織が整っていることが推測される。しかし、中国王朝を宗主と仰ぎ、その権威を背景としようとした共立王権の伝統も残されている。

この413年から502年に及ぶ倭王、讃・珍・済・興・武を倭の五王と称し、日

本書紀の天皇系譜と照合したり、巨大古墳群の陵墓に比定したりされている。またまた、倭・倭人の記事はすべて現在の日本列島とその住民のことであるのか、倭の五王は大和朝廷の歴代天皇に比定してよいのか、河内のどの陵墓が倭の五王の王陵に比定できるのか、などの問題については解決されていない問題点が多い。倭の五王にしても、一系ではなく、讃・珍の系譜と済・興・武の系譜があることが指摘されているし、河内の巨大古墳群にも2形式の築造企画がみられること、高句麗好太王碑文にみられる4世紀末からの朝鮮出兵、交戦と関連する古墳出土の武器・武具の検討、さらに倭王武は間違いなく雄略天皇であるのか、ワカタケルは雄略天皇であっても、雄略天皇は倭王武とはいえないのではないか、などの問題の究明が必要であろう。

(参考文献)

- 村川行弘「新版考古学講座」4・原始文化・近畿・雄山閣・昭和47年
村川行弘「田能」・学生社・昭和42年
村川行弘「増補会下山遺跡」・奈良明新社・昭和60年
末松保和「任那興亡史」・吉川弘文館・昭和24年
三品彰英「日本書紀朝鮮関係記事考證」・吉川弘文館・昭和45年
李進熙「廣開土王陵碑の研究」・吉川弘文館・昭和47年
鄭寅普「廣開土境平安好太王陵碑文釈畧」・ソウル・1955
朴時亨「廣開土王陵碑」・朝鮮民主主義人民共和国・1966
金錫亨「初期朝日関係史」・朝鮮民主主義人民共和国・1966
藤間生大「倭の五王」・岩波新書・昭和47年
中塚明「近代日本史学史における朝鮮問題——とくに廣開土王陵碑をめぐる——」
・思想・561号
笠井倭人「研究史・倭の五王」・吉川弘文館・昭和48年
原島礼二「倭の五王とその前後」・塙書房・昭和45年
和田清・石原道博「魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝」・岩波書店
・昭和26年
井上薫「日本古代の政治と宗教」・吉川弘文館・昭和36年
関 晃「帰化人」・至文堂・昭和31年
上田宏範「前方後円墳」・学生社・昭和47年

2 倭王権の所在地と倭の五王の比定

古代国家形成史の観点からみると、海外史料にみられる倭王権は、部族同盟

の段階、地域政権の段階、国家的機能をもった首長制政権の段階を経過していることが指摘されている。8世紀の律令国家のように「法律制度・官僚機構・税制・兵制の整った中央集権国家」でないと国家とはいえないというのであれば、古代国家は地球上には存在しなくなる、という見解も成立する。

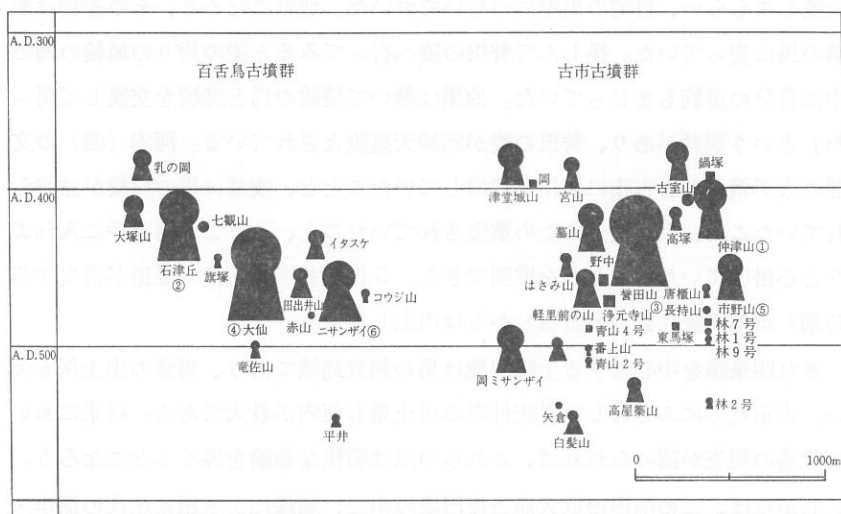
1984年9月6日、全斗煥大韓民国大統領を迎えた宮中晩餐会での「天皇のお言葉」にも、「紀元6・7世紀の我が国の国家形成の時代には、多数の貴国人が渡来し、我が国人に対し、学問・文化・技術等を教えたという貴重な事実があります。永い歴史にわたり、両国は、深い隣人関係にあったのであります」という、日本の国家形成期を6・7世紀とすることを世界に宣言された箇所がある。大和・河内の地域には4・5世紀の巨大古墳群が多量に遺存している。これら巨大古墳群の被葬者達は国家形成期以前の存在で、我が国の王朝の歴史には含まれないことになるのだろうか。じつは王朝とか王朝文化という表現は、先年までは平安朝のことを指す表現であったが、近時は北九州王朝・出雲王朝・三輪王朝・河内王朝・近江王朝・但馬王朝などの言葉で地域政権の段階・首長制国家の段階の別なく、記紀批判から出発したとしても記紀の皇統譜に依拠し、時に考古学資料に依拠しながら古代王朝論が展開されている。北九州地域・吉備地域・近畿地域・山陰地域・北陸地域・関東地域など地域政権・地域首長の存在した時期と首長制国家の形成期とを混同してはならない。

倭王権の国家形成期は考古学でいう弥生時代から古墳時代に移行する時期にあたる。弥生時代の墳墓をみても地域首長墓は明確に検出されている。古墳時代でも、前期・中期の前方後円墳の分布状況、墳丘の規模、副葬品の内容などから容易に地域首長墓、大王陵墓の判定ができる状況である。大規模な治水工事の遺構なども、強大な統制力と権力の証しとして検証資料となる。この点で倭の五王の世紀の大王陵墓となると、河内・大和の巨大古墳群以外には他所に大王墓を求めることは難しい。歴然たる大王墓の所在する大和・河内の4・5世紀の巨大古墳群を無視して、古代国家の形成期を6・7世紀とすることには痛みを感じる。したがって、讃・珍・済・興・武の五王の墳墓を同時代の巨大古墳で選ぶことになると河内の巨大古墳群の中から選ぶことが妥当であり、この点からは倭の五王の王権の所在地は近畿も河内の地域ということになる。因

みに日本の10大古墳といわれる巨大古墳は次の順位である。

1. 仁徳天皇陵(大山古墳)・堺市大仙町・墳丘長486米・中期
2. 応神天皇陵(誉田御廟山古墳)・羽曳野市誉田・430米・中期
3. 履中天皇陵(上石津ヶ丘古墳)・堺市上野芝町石津ヶ丘・365米・中期
4. 新庄下造山古墳・岡山市新庄下・350米・中期
5. 陵墓参考地(河内大塚山古墳)・松原市・羽曳野市・335米・後期
6. 陵墓参考地(見瀬丸山古墳)・橿原市五条野町・318米・後期
7. 景行天皇陵(渋谷向山古墳)・天理市渋谷町・310米・前期
8. 陵墓参考地(土師ニサンザイ古墳)・堺市百舌鳥西之町・290米・中期
9. 仲津姫皇后陵(仲ツ山古墳)・藤井寺市沢田・286米・中期
9. 三須作山古墳・総社市三須・286米・中期
10. 陵墓参考地(箸中山古墳)・桜井市箸中・276米・前期
10. 神功皇后陵(五社神古墳)・奈良市山陵町・276米・前期

以上のように前期・中期・後期を含めて規模からみた10大巨墳の中には、6基まで河内に所在する古墳が含まれている。河内では墳丘長150米以上の規模をもつ前方後円墳は10基を数える。河内王朝などといった地方王権の首長墓ではなく、倭王権の大王墓群である。しかも、そのほとんどが歴代天皇の陵墓に治定され、宮内庁の管理下にあり、このために巨大古墳が造成などによって消滅することなく保存されてきたともいえる。一方では国家の形成期は6・7世紀といい、一方では4・5世紀の巨大古墳が歴代天皇の陵墓として治定されているのである。陵墓は公人の墳墓という理解はなされていないので、学術研究の機会が与えられることは無く、僅かに周溝部分の修覆に際して、歴史12学会の限られた代表者だけが見学を認められる状況であるため、墳丘内の立入りや、発掘調査による確認などは論外のことであり、宮内庁が陵墓管理のために作成した陵墓実測図によって、規模を測定したり、築造企画の研究が進められている。陵墓治定についても、平安時代の皇族の陵墓が4世紀末の前方後円墳に治定されていたりして、現在の古墳研究の成果からみれば問題点が多く出ている。兆域についても、周溝や外堤まで含められたものもあるが、墳丘のみの場合や墳丘の一部のみの場合もあり、修覆に際して主体部や兆域を損壊したの



一瀬和夫氏による「埴輪による古市・百舌鳥古墳群の編年試案」
(ヒストリア第115号・1987年による)

ではないかと考えられる陵墓もある。

大和には箸墓・西殿塚をはじめとする女王卑弥呼と同時代の墳墓をはじめ、行燈山古墳（崇神天皇陵）→渋谷向山古墳（景行天皇陵）と続く磯城・磐余の前期古墳群、西大寺周辺を中心とする佐紀盾列古墳群などの前期巨大古墳があり、副葬品の特色として、未だ呪的・祭祀的要素の強い遺物がみられ、武器・武具についても最新式だけでなく、旧式・中古式が含まれていることが注目されている。これに対し河内の古市古墳群・百舌鳥古墳群は盛期（中期）の前方後円墳が主であり、最新鋭の武器・武具の大量副葬で知られている。400年に倭兵が高句麗の歩騎5万に破れたのは騎馬戦術に圧倒されたためで、以後、馬・馬具の関心が強まったとされているが、馬伝承の代表である応神天皇陵（菅田御廟山古墳）は河内に所在する。

日本書紀の雄略天皇の条に「飛鳥戸郡の人田辺史伯孫の娘が、古市郡の人書首加龍という人の妻で、子供が生れたため聳の家にしかけたが、帰りに菅田の陵まで来ると赤駒に乗った人に会った。その馬がすばらしい駿馬であったので羨ましく思った。赤駒の人が交換してくれるというので、喜んで自分の斑駒と

交換してもらい、自宅の馬屋につないでおいた。翌朝になると、その赤駒は埴輪の馬に変わっていた。怪しんで菅田の陵へ行ってみると陵の周りの埴輪の馬の中に自分の斑駒もまじっていた。伯孫は驚いて埴輪の馬と斑駒を交換して戻った」という説話があり、菅田の陵が応神天皇陵とされている。河内(西)の文部の人が飛鳥部と古市に居住し通婚していたことと、陵墓に馬の埴輪が並べられていたこと、馬が交通のため重宝されていたこと、よりよい馬を手に入れようと心掛けていたことなどを推測できる。5世紀前半の埴輪(黒斑が消失する時期)が応神陵(菅田山古墳)からは出土している。

また四条畷を中心とする生駒山麓は馬の飼育地域であり、馬骨の出土例も多い。大王たちにふさわしい眉庇付冑の出土量も河内が最大である。将来において陵墓の調査が認められれば、これらの点は明快な結論を導くことになる。

しからば、この河内の巨大前方後円墳の中で、埴輪による相対年代の編年・前方後円墳の企画性などの成果を踏まえて、倭の五王の世紀(5世紀初頭～終末)にあたる大王陵墓にふさわしい古墳を選び、その年代に当てて比定してみると、仲津媛陵〔仲ツ山古墳・古市・墳丘長290米〕→履中天皇陵(石津丘古墳・百舌鳥・365米)→応神天皇陵(菅田山古墳・古市・415米)→仁德天皇陵(大山古墳・百舌鳥・486米)→允恭天皇陵(市ノ山古墳・古市・227米)→陵墓参考地(ニサンザイ古墳・百舌鳥・290米)を選ぶことができる。

仲津媛陵が讃、履中天皇陵・応神天皇陵が珍か濟、仁德天皇陵が済が興、允恭天皇陵が興、ニサンザイ古墳が武ということになる。雄略天皇陵の伝承をもつ河内大塚山古墳(陵墓参考地、古市・335米)を武に当てる研究者もいるが、私は6世紀中葉の古墳と推定している。

河内大塚山古墳を雄略天皇陵と考える人達は現在治定されている高鷲丸山古墳(円墳)と平塚古墳(方墳)を後世に接合して前方後円墳形とした陵墓を否定している。しかし丸山古墳出土の埴輪は5世紀後半の特色をもち、雄略天皇の時期にあたる。むしろ河内大塚山古墳の前方部中央前端が剣菱形に突出する形式は、継体天皇陵墓と研究者が考えている摂津の今城塚と類似し6世紀中葉と考えるのが妥当である。なお継体天皇陵に治定されている大田茶臼山古墳は5世紀後半の埴輪を出土していて時代は合わない。

倭の五王の墳墓を古市・百舌鳥古墳群で特定することは困難であるが、西暦400年から500年の相対年代の中で、同時代の古墳のうちで、立地・規模・遺物などの参考資料をもとに、群を抜く優越性をもった古墳という一定の範囲内で比定することは可能である。

宋書の倭国伝の記事からは讃一珍と済一興一武の系譜はつながっていない。これは大王権の継承の問題で、これを記紀の皇統譜に当て歴代天皇に比定するのは別の問題である。ワカタケルは埼玉県稲荷山古墳・熊本県江田船山古墳出土の鉄剣の銘文からも雄略天皇のこととみられているが、歴年代からみて雄略天皇が倭王武であり、これを手掛りに記紀の皇統譜から、倭の五王をそれぞれの天皇に比定することには同調できない。ワカタケルを蓋鹵王とする説もあり、ワカタケル＝雄略天皇を含めて今後の課題事項としておきたいと思う。

古代国家形成の画期を示す中国史料の倭の五王の記録は、欠史時代の我が国の河内巨大古墳群形成の時期にあたり、その規模・副葬品からも倭の五王という大王陵墓は河内に所在すると考えられ、河内に大王権の存在を肯定できるのである。同時に河内に遺存する前方後円墳は、4・5世紀の倭国に君臨した強大な王者たちの権力・経済力・統制力を示すシンボルでもあり、対外的にもその偉容を誇示したものである。陵墓の調査により大王権の実態と国家形成期の実状が明らかにされる日を期待したい。

(参考文献)

- 森浩一「巨大古墳の世紀」・岩波新書164
斎藤忠「古代朝鮮・日本金石文資料集成」・吉川弘文館・昭和58年
東アジアの古代文化・37・44・大和書房
邪馬台国・30号・梓書院
古代東アジア史論集・上巻・下巻・吉川弘文館・昭和53年
堀田啓一「肩庇付冑にみる日韓関係」・韓国文化・1984年8月号
泉隆武「邪馬老国の原点倭」・講談社・昭和54年
石部正志「畿内の巨大古墳と倭の五王の世紀」・ヒストリア90号・1981年
小野忠淵「高地性集落と倭国大乱」・雄山閣・昭和59年
大熊規矩男「神社之考古学」・自家版・昭和48年
堀田啓一「古代日朝の馬冑について」・橿原考古学研究所論第7・吉川弘文館・昭和59年

- 原島礼二・石部正志・今井堯・川口勝康「巨大古墳と倭の五王」・青木書店・1981年
古市古墳群研究会「古市古墳群とその周辺」・摂河泉文庫・1985年
上田宏範「前方後円墳築造の計画性」・古代学研究第2号・1950年
川西宏幸「円筒埴輪総論」・考古学雑誌第64巻第2号・1978年
村川行弘「親王塚・親王寺所蔵遺物の再検討」・考古学雑誌第65巻第3号・昭和54年
北野耕平「河内野中古墳の研究」・阪大国史研究室報告第2冊・1976年
山本昭「松岳山古墳群の被葬者集団」・柏原市教委調査報告書・昭和61年
野上丈助「河内の古代遺跡と渡来系氏族」・自家版・1980年
村川行弘「陵墓問題について」・ヒストリア106号・1985年
村川行弘「日本国家の形成期と河内の巨大古墳」・総合科学研究所年報4号・1985年
石部正志・一瀬和夫・宮川渉・笠井敏光・白神典之・森村健一・田中晋作「古市・百舌鳥古墳群の巨大古墳をめぐる」・ヒストリア第115号・1987年
王健群「好太王碑の研究」・雄渾社・1984年
鳥越憲三郎「神々と天皇の間」・朝日文庫・1987年
有坂隆道「景初四年銘の鏡と邪馬台国」・飛鳥史学文学講座第三講・昭和62年

本稿は昭和61年度大阪経済法科大学研究補助金による研究の一部である。